

なく、ゴルフに乗っておられた)で Stuttgart 空港迄送って下さった。先生の危惧どおり、霧のため飛行機は離着陸できず、私たちは Luft Hansa の仕立てたバスで空港から Frankfurt へ向かった。先生はバスの窓ごしに手を振りながら、“この次は汽車にきなさいよ、Auf Wiedersehen”といわれた。

Bünning 先生御夫妻は、何人かの会員の方も御存知のように、国籍、年齢などに全くこだわらず、学問を愛し、仲間を愛する真の意味のヒューマニストである。Bünning 先生と夫人は真に日本を愛し、そして日本の人たちを愛した。先生の知己だった田宮博、芦田譲治というお二人の本学会名誉会員も今はなく、このたび Bünning 生を失ったことはドイツや日本の学界のみならず、世界の植物学界にとっても大きな損失である。本年 12 月会議で渡独の機会に田沢先生をはじめ、日本の植物生理学者有志に代って Tübingen を訪れ、Bünning 先生のお墓にお参りする機会を私が得られることになったのも、師弟関係のない私にとって破格の光栄と思っている。今はただ先生のご冥福を祈るのみである。(日本植物生理学会通信、50:3-6、1990; 同内容論説「In memory of Professor Erwin Bünning」JSPSP Newsletter 25:6-12、1991)

「Bünning 先生のお墓まいり」

本「学会通信」1990、11、15 (第 50 号) で報告したように、同年 10 月 4 日に亡られた Erwin Bünning 先生の真新しいお墓まいり、夫人にお目にかかる機会を得たので以下報告したい。

1990 年 12 月 1 日、Eleonore Bünning 夫人、Achim Hager 教授、そして同行した妻と私は Tübingen 北郊の丘の上、Auf der Morgenstelle 近くの Friedhof (墓地) にある故 Erwin Bünning 先生のお墓に参った。その日は前日降った小雪の名残で、薄っすらと雪が地を覆い、道も凍った比較的寒い日であった。

まだ石碑は完成していなかったため、木の十字架に、1958 年に山の遭難で亡くなった長男の Klaus と Erwin 名が記してある簡素なお墓であった。かねて Hager 教授が用意してくれていた花輪 (Kranz) を捧げ、日本から持参した日本酒パックの口を開けて墓前に供え、Bünning 先生の御冥福を祈った。この日本酒は田沢仁先生からとくに指示されたもので、Eleonore 夫人は、日本酒の好きだった Erwin はさぞ満足しているだろうと喜んでおられた。

帰路、Bünning 家に招ばれ、夫人心づくしのお茶とお菓子をごちそうになった。夫人は 1978 年ご夫妻来日の時の写真アルバムを揃え、いかに Erwin が日本と日本人を愛していたか、どれほどもう一度日本を訪ねたいと望んでいたかを繰り返し語られた。ここで田沢先生はじめ、Bünning 先生と親しかった日本の植物学者有志 (古谷雅樹、原田市太郎、神谷宣郎、増田芳雄、瀧本敦、田沢仁、ABC 順) の贈物を夫人に手渡した。これは祥瑞模様の清水焼のお皿で、裏面に田沢先生の筆で次のように記した文が焼きつけてある。

In dankbarer Erinnerung
an unseren verehrten Lehrer und Freund
Professor Dr. Erwin Bünning

Kyoto, Oktober 1990

(以下 有志名)

夫人はこの贈物を殊のほか喜ばれ、翌日お目にかかったとき、この有志の方々に対する次のお礼状を私に託された。

"Dear friends in Japan:

Today Prof. Masuda brought me a wonderful present. I am happy that you don't forget my dear husband, your friend, Erwin Bünning. He loved Japan and Japanese people. In the hospital when he was very ill, he said: I want to visit Japan one more. It was impossible to do. He passed away, and we miss him not only in Germany. I am happy that Prof. And Mrs. Masuda visited his grave, and every day I look to the wonderful present and know "He is not forgotten."

My best wishes and greetings to you all.

Your thankful

Eleonore Bünning

その日、私たちは Hager 家に夕食に招待されたが、この日 Eleonore 夫人はかねてから悩んでおられた胃痛のため Hager 教授の招待を受けなかった。そこで翌日 Hager 夫妻は昼食に再び Eleonore 夫人と私たちを招いてくれ、この日 Eleonore 夫人は Hager 家に来られた。夫人は案外元気で、83 歳の高齢ながら自ら Volkswagen Golf を運転して来られた。Weisswurst を中心とした Hager 夫人心づくしの昼食を頂きながら一同 Bünning 先生のことなどをいろいろ語り合った。翌日には相続など先生逝去後の諸手続きのため、Hamburg から次男 Otto と弁護士が来るとのことであった。Eleonore 夫人は前回、先生が御病気になる前に Tübingen でお目にかかったときよりずっとお元気そうだったのは予想外の嬉しいことであった。Hager 教授は、先生の亡くなられたあとずっと忙しいので、返ってこれが幸いしている、と言っていた。

11月30日に大阪を立ち、12月1日早朝 Frankfurt am Main 着、乗り継いで Stuttgart 空港へ着いたのが午前 10 時、植物学教室、Hager 家での昼食、ホテルへチェックイン、そして墓参り、Bünning 家、Hager 家訪問、と慌ただしい一日であった。翌日も朝から Hager 家へ招かれ、午後 3 時に Stuttgart 発、Bonn へ、という忙しい日程で、同地における 12 月 3 日からの会議に間に合ったわけである。この慌ただしい日程の中で、Hager 教授は私たちを Stuttgart 空港やホテルへの送り迎え、同家への再三にわたる招待と、Bärbel 夫人はもとより、お嬢さんの Ulrike まで総動員で私たちをもてなしてくれた。短い訪問であったが、田沢先生はじめ日本の有志の先生方に代わり、無事に大役を果たせたことに私は満足をおぼえた。たまたま私がこの機会を得、とりわけ Eleonore 夫人、そして Hager 教授と夫人が私たちの訪問を歓迎してくれたことを幸せに思ったしだいである。

会員の皆さんがもし Tübingen を訪れ、Bünning 先生のお墓に参られる機会があれば、おそらく立派な墓石が完成していることと思う。Bünning 先生の御冥福と Eleonore 夫人の御壮健を祈りたい。(日本植物生理学会通信 51:2-3, 1991; 同内容の論説:「Visiting Professor Bünning's grave」JSPN Newsletter 26:10-12, 1991)